



GOVERNOR'S MONTHLY LETTER 2002-2003

2月 ガバナー月信

No.8

ROTARY INTERNATIONAL DISTRICT 2760 2003年2月1日発行



騎馬武者像

2月 は、世界理解月間です。

ガバナーメッセージ	2	ROTEXの集い	12
知多RC創立15周年	3	米山奨学生アンケート(1)	14
秋の野球大会	3	米山奨学生・学友合同忘年会	17
「座談会」青少年に未来を	4	文庫通信	18
「インタビュー」ロータリー財団学友会代表幹事	8	出席報告	19
青少年交換受入留学生アンケート(1)	10		

国際ロータリー第2760地区 ガバナー 岡部 快圓

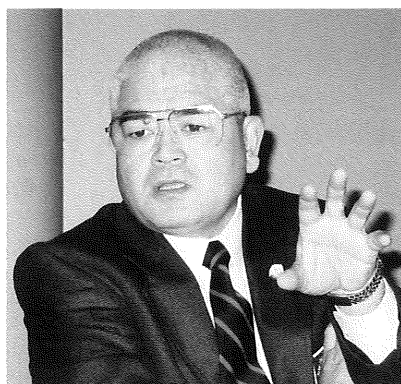
〒460-0011 名古屋市中区大須2-21-47 大須観音宝生院内

TEL 052-229-8110 FAX 052-232-1023 E-mail: governor02-03@rotary2760.org

Governor Message

ガバナーメッセージ

ガバナー 岡部 快圓



親愛なる会長さん、幹事さん、会員の皆様お元気ですか、本年度も半年が過ぎ慈愛のところで、クラブの目標に向けて邁進、努力されていることと存じます。

今月の2月23日はロータリーの創立以来98回目の記念日であり、23日から3月1日まで「世界理解と平和週間」となっていますが、世界の各地に於いてはロータリーの奉仕活動を必要としている地域が多く存在します。

国連機関によりますと、想像を絶する数の児童が世界中、極めて困難な状況の下での生活を余儀なくされています。

- ・ 4千万人余りの14才以下の児童が虐待または放置に苦しんでいます。
- ・ 推定2億5千万人の年齢5才から14才までの児童が、労働を強いられています。
- ・ 1億以上の児童が路上で生活をしており、搾取、薬物および犯罪の危機に晒されています。
- ・ 1千2百万人近くの5才以下の児童が毎年、予防可能な児童疾病と栄養失調により死亡しています。
- ・ 1億3千万人の小学生にあたる年齢の児童（そのほとんどが女子）が、学校に通っておらず、短命や貧困と疾病に陥る危険性にさらされています。

また、世界的に10人に1人がなんらかの障害を持っているということです。そのうちの80パーセントが開発途上国民で、貧困、飢餓、伝染病、疾病、および戦争が原因でその率を増加しています。多くの障害は防ぐことができ、治療することができます。

- ・ 世界に1億6千万人いる視覚障害者のうち、恐ら

く20パーセントは、簡単な白内障施術を受ければ目が見えるようになります。

- ・ 約1億2千万人の人々が聴覚障害を持っていますが、全ての聴覚障害の50パーセントは、避けることが可能だと推定されます。
- ・ 5才以下の児童がかかる病気で致命的なものや不具にいたらしめるものの多くは、予防接種によって避けられるものです。過去15年間のポリオ撲滅運動により、ポリオの犠牲になっていたかもしれない4百万人の児童が、普通に歩いたり、遊んだりしています。
- ・ 64カ国に点在する1億の地雷により、毎週約150人の負傷者が出ています。少なくとも2億8千万人がこれらの地雷による危機に晒されています。

飢餓はこれまで収入の欠如を意味してきましたが、保健サービスや教育が受けられないことや、栄養の欠如、および失業もまた、飢餓と同じなのです。お腹を空かせている人々が、教育を受けたり、実践的な技術を身につけたり、職を見つけて維持する気力をもっていることは稀です。

- ・ 13億近くの人々、すなわち世界人口の5分の1が、わずか一日当たり米賃1ドル余りの生活費で究極の貧困状態で暮らしています。
- ・ 8億4千万人、すなわち世界中で7人に1人が、栄養不良に陥っています。
- ・ 世界の食糧生産は十分であるにもかかわらず、食糧を最も必要としている人々に行き渡っていません。
- ・ 国の健康と生産力が低下するにつれ、国は経済的および社会的困難に陥りやすくなり、政治的にも不安定になる傾向があります。

世界には奉仕の機会が多く存在しており、皆様の慈愛の種を待ち望んでいます。世界中の人々が安全で豊かな生活ができるよう「慈愛の種を播きましょう」。



知多ロータリークラブ 創立15周年記念例会

日時 2002年12月15日(日)

場所 全日空ホテルズ グランコート名古屋



知多RCは、1987年12月14日に常滑RCをスポンサークラブとして創立され、本年創立15周年を迎え12月15日(日)に全日空ホテルにおいて創立15周年記念例会を開催いたしました。

当日は、岡部快圓ガバナーはじめ伊藤宏地区幹事、藤本博之米山奨学会委員長、石川敬R財団委員長、南尾張分区5クラブの会長・幹事、地域からは加藤功知多市長、後藤律次社会福祉協議会会長様のご臨席を賜り、盛大に記念例会を開催することができました。

例会では、岡部ガバナー、加藤知多市長よりご祝辞をいただき、続いての記念事業の報告では、米山奨学会、R財団、社会福祉協議会に目録の贈呈を行い、代表して社会福祉協議会会長の後藤律次様より御礼の言葉をいただき、無事記念例会を終了することができました。

引き続き稲山達弘ガバナー補佐の乾杯により祝宴が始まり、当クラブの国際奉仕活動「ドイツ国際平和村」に関わりの深い、林夏子様による「シャンソンの夕べ」を聞きながら楽しい一時を過ごすことができました。



豊田RC優勝!

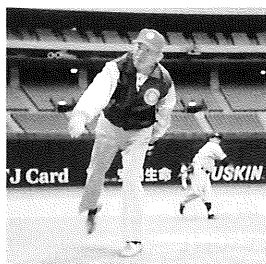
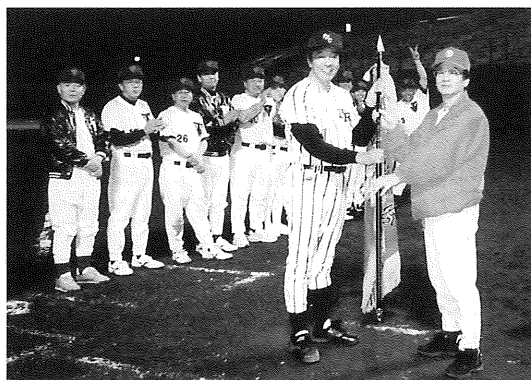
第2760地区秋の野球大会

全国甲子園大会へは豊田RCと名古屋中RCが出場!!

第2760地区秋の野球大会が加納バスターガバナーをお迎えして、盛大に行われました。

●予選 11月5日(火) ナゴヤドーム球場
名古屋中RC 3 × 8 豊田西RC
豊田RC 10 × 1 豊田東RC
豊山城北RC 5 × 22 豊田中RC

●準決勝 11月19日(火) 豊田市運動場公園野球場
名古屋瑞穂RC 5 × 16 豊田西RC
豊田RC 8 × 1 豊田中RC
●決勝 11月26日(火) 豊田市運動場公園野球場
豊田RC 10 × 4 豊田西RC



以上のように豊田ロータリークラブが優勝いたしました。

従って、来る全国甲子園大会には豊田RCと抽選により名古屋中RCの2チームが参加することになりました。

各クラブの選手をはじめ世話役・審判の皆様協力により無事終了いたしました。

青少年交換委員会座談会

テーマ

「青少年に 未来を」

出席者 委員長：大谷 和雄

副委員長：服部 和史

委員：黒田 勝基

鈴木 吉男

森 榮

安藤 隆利

進行係：地区副幹事 浅井 隆宣

司会：まずは、ロータリアンの方々に理解を深めていただく意味で委員会の歩みをざっとご説明いただけますでしょうか。

大谷：そもそも1927年、語学留学のない国々との親睦を中心に国際理解を深めようと、高校生を対象とした「青少年交換」をフランスで行なったことが始まりです。当2760地区では、1968年からアメリカ・カナダ・オーストラリア3カ国との1年間の交換を開始し、これまで派遣・受入それぞれ約320名の実績があります。また当初は、英語圏である先の3カ国を中心に行なっていましたが、5、6年前から非英語圏のブラジル・北ヨーロッパ・アジアへと拡がり、今では12カ国と交流するまでになりました。しかし全世界には200カ国もありますので、これからこの活動をどう拡げ、いかに展開してゆくかが私たちの課題かと思っております。

司会：では現状についてお聞かせください。

服部：現在、派遣中の学生は8名。受入留学生は12名です。そして今、派遣候補生としてオリエンテーションを受けている方が20名になります。従来、交換学生は7月からスタートしますが、実際には派遣が3月と8月、受入が1、3月と8月と期をまたいでいます。今年度は派遣・受入ともに20名の予定です。

司会：8名から20名、ですか。その数の変化はどういうことなのでしょう。

服部：例年15、6名が普通ですが、昨年度は受験生が極端に少ない異例な年だったんです。

司会：派遣留学生が1年後に帰ってきた時、その成長ぶりを実感します。それだけに8名というのは残念なことですね。

大谷：本当に残念でしたね。かつてこんなことはありませんでしたし、「PRの仕方が悪かったんじゃないか」という意見も出ましたが、今年の20名を超える応募数からすれば、そうとも言い切れ

ません。

司会：何か、特別に変わったことでも？

大谷：いえ、ないんですよ。

鈴木：でも、新しい学校からの応募も増えましたね。

司会：学校によって片寄りがあるのでしょうか。主に、どんな学校が多いんですか？

鈴木：ずっと継続されて応募があるのは尾張地区です。

大谷：しかしPRも変わりなく行なっていましたし、8名というのはどうにも納得いかないですね。

服部：やはり8名ということがあったもんですから、国際奉仕委員長会議、地区協議会をはじめ、前期・今期ガバナーに直接お願いして公式訪問でも随分PRしていただきました。今回はその成果があったのかもしれません。

大谷：ポスターなどは各高等学校に全部送っているんです。でも、学校の先生方がそのポスターを貼ったり、プログラムについて生徒たちにどこまで熱心にご説明くださっているのか。ご理解のある校長先生や教頭先生がいらっしやればいいのですが。

鈴木：あと各ロータリーが学校側へ、積極的にアプローチすることも大切です。正直な所、それをすればロータリアン自身が留学生を受入れなければならない。そんな煩わしさを嫌う部分もあるのかもしれません。

鈴木：メンバーのご子息を出すのであれば受け入れやすいでしょうが、他の方を出して自分たちで受ける、というのには抵抗があるんでしょう。どうも日本人はこういうことに向いていない人種みたいですから。

黒田：頭の中で考えてしまうと、1年間も受入れなければいけないという煩わしさが先行しちゃうんですね。実際3、4ヶ月ともに過ごし、送り出してみればその良さを身をもって実感いただけたと思うのですが…。ですから一回でもご経験いただくことが、このプログラムを発展させる

キーポイントだと思います。

司会：ご子息を派遣していらっしゃるれば預かろうという気持ちにもなりやすいでしょうし、一度、ご経験なさると随分、違うんでしょうね。

黒田：このプログラムの特徴は、ロータリーの活動の中でも唯一、ロータリアンの子弟も参加できるんです。それをもっとアピールすれば、年齢的にも適した方がかなりまだいらっしゃると思います。あと、数が急激に変動するというのが一番困りますね。今年は派遣が8名、受入が12名です。やはりこのプログラムは“継続”することが非常に重要なことであり、せっかく相手国と関係を保ってきても、一度途切れてしまうと復活するのが大変なんです。そのためには、予算の関係もありますが毎年14、5名が最も適正な人数かと思っています。ですから派遣の8名は少ないですし、逆に20名では多いような気がします。

司会：県内79クラブあって20名ということですが、各クラブで1名という割当てですか？

服部：今年は2名というクラブもございます。

司会：そうなりますと、全体で4分の1以下のクラブしか預からないことになってしまいますね。まだ未経験のクラブにどう啓蒙していくかも重要なことでしょうね。

安藤：私のクラブでは、預かる率は比較的高いのですが、同年代の子どもがいた方がいいなど、生活環境によってクラブ内でも受入家庭が限られてくるんです。

服部：ホストファミリーの問題は、当地区に限らず、世界会議でもいつも議題に上るんですよ。確かに理想をいえば同年代のお子様がいる家庭が最適です。ただ日本では、受験生を抱えた家庭もありますし、逆に子育てから手が離れた状態で毎日お弁当を作らなければならない家庭など、やはり敬遠されてしまいます。どのクラブでもロータリアンの平均年齢も上がっておりますし、お子様がいる、いないに関わらず、何とかホストファミリーをお願いできる数を増やしていくことが必要だろうと思います。

司会：留学生の男女比率はいかがでしょう。

安藤：圧倒的に女性が多いですね。

服部：今年度も20名中男子が4名ですから、その辺りもネックになっているかもしれません。

森：女性の立場から申しますと、やはり全体的に女性パワーが強いですし(笑)ただ今年、初めて面

接に立ち合わせていただきましたが、男性もなかなか優秀で個性的な子ばかりでした。ですがチャンスとしては平等に与えるべきでしょうし、男女、同人数という規制を設けるのは難しいかと思っています。

司会：応募者数はどのくらいだったんですか。

一同：25名です。

司会：ではその選考基準というのは？

服部：基本的にはペーパーテストと面接を行います。しかしだからといって、必ずしも成績の上位順で選ぶわけでもありません。

鈴木：やはり中学生から高校生までいますし、向き、不向きという部分もありますから。

黒田：それから最近是非英語圏への派遣もありますが、ベースとして英語のテストは必要ですね。ただし、その成績プラス、積極性を基準にしています。

司会：希望国も影響するんでしょうか？

黒田：やはり最初の面接、オリエンテーションの時点

では、ほとんどの子が英語圏を希望します。一番人気はオーストラリア、アメリカ、カナダです。しかし、最初のオリエンテーション時に、帰国したローテックスからの体験談を聞き、非英語圏であるブラジルなどにも大変興味をもつようです。

服部：それから、こちらが指定した国へ行ってもらうことが絶対条

件で、どんなに成績が優秀でも「英語圏しか行かない」という子では合格にしません。

司会：とりあえず希望は聞けけれど、最終的にはこちらの指定した国へ行ってください、ということですね。

服部：ええ。面接では親御さんも同席していただきますし、それを納得いただいた上で可否を出しています。

大谷：逆に受入れる中で、日本を第一希望に挙げる留学生は少ないですよ。

鈴木：3番目か4番目でしょう。

司会：去年、韓国から派遣された子がいましたが…。

大谷：あの子も最初はアメリカを希望していたようですが、おじいさんが「日本に行け」ということでね。

安藤：韓国からは初めてだったんです。

黒田：それもようやく受入だけで、残念ながら交換ではありません。この1、2年以内には韓国との交換をぜひ実現させたいんです。



大谷：年々、交流する国々も拡大しておりますが、これからはやはりアジアですね。

黒田：私はアジア担当ですので、そうおっしゃっていただけると非常に有り難いですが（笑）

服部：基本的に英語圏へ行けば英語が上達し、大学入試にも有利になるという考えが底流にあるものだから、アジアへの希望者がどうしても少なくなってしまう。

鈴木：受入のバックボーンの問題もあると思いますよ。受入れる学校側が英語なら対応できるが、他の国ではちょっと、と難色を示す場合もあるようです。

森：今回、私も経験しまして、学校側にブラジルの子を預かって欲しい、とお願いしましたら「英語が話せなければ困る」というご返事で…。幸い、その子は英語の成績が素晴らしく良かったので現在交渉中です。

黒田：ブラジルもいいですし、全国の会議でよく出るお話ですが、インドや南アフリカなども素晴らしいようです。

鈴木：フィンランドから「リトアニアと交換しないか？」というお話もあります。

黒田：確かにいろいろな国とお付き合いしていきたいのですが、先ほど申しましたように“継続”が大切で、一度やりますと次年度も、ということになります。現在、アメリカの8、9地区、台湾、韓国、フランス、ドイツ、ノルウェー、フィンランド、オーストラリア、カナダ、タイランド、ブラジル、ヴェネズエラとざっと12カ国と交流していますが、やはり地区予算からすれば15、16名が限度で、これ以上交流国を増やせない実情も抱えているんです。従来交流国をやめて新しい国を開拓する、という方法もありますが、やはりこれまでのお付き合いもありますので。

司会：では、そうした問題点も含めまして、青少年交換委員会の今後の方針は？

大谷：やはりそうした実情も抱えておりますが、今後とも英語圏に偏らず、アジア諸国へも派遣・受入国の拡大を図っていきたいと考えています。毎年5、6月に世界大会が行われますが、その前々日に青少年の世界会議が行われるんです。そこでブラジルなどから「ぜひ日本に受入れて貰いたい」という嬉しい言葉を沢山かけていただきます。また今年は日本主催の『JAPAN NIGHT』

を各国の方々をお招きして、催します、これを新たな交流のきっかけにし、派遣拡大をはかっています。委員の皆さんには、こういうイベントに出席して頂き、平生から大変お骨折りいただいておりますが、やはり子どもたちが帰国しますと本当に成長しているんです。苦労も非常に多い仕事ですが、熱も入るわけです。

服部：これはぜひ申し上げておきたいのですが、当地区では青少年交換のご寄付を1,200万円ほど頂戴しております。ほとんどが受入学生のため、ホストファミリー補助金として使わせていただいているわけです。単純計算すれば、学生1人当たり月5万ほどでしょうか。昨年から4万円に下げさせていただきましたが、大変有り難いことだと感謝しております。

大谷：また一方で、皆様にぜひご協力いただきたいのは、派遣の募集活動ですね。各クラブで学校に赴き、先生方に趣旨をご理解いただけるようお願いいただくと存じます。

黒田：先ほど、受け皿となるロータリアンの高齢化の問題もありましたが、東京のロータリーでは受入クラブを輪番制でやっているところがあるんです。我々は送り出したクラブに受入れていただいておりますが、それとは違って強制的に持ち回りしているんです。

鈴木：東京ですと、実際にはどこのロータリーで受入れるか分からないですね。そうしますと、例えば一つのところで門前払いされると、また別のところへ持って行って、という具合です。ですから順番を変えていかないと結局は不公平になると思うんです。名古屋も同じかと思いますが、市内ですと22ロータリーのうち、学校所在地ならどこへ持って行っても構わないわけで、結局は限られたクラブだけが引き受けることになってしまう。やらないところはずっとやらないままでしょうし。

黒田：この活動も1968年にスタートして34年経ったわけですが、2002年の初めまでに派遣が313名、受入が317名です。そのうち経験があるのは58クラブ、10名以上の派遣・受入経験となると11クラブです。ということは、35年間で5回以下のクラブがほとんどなんですね。これをどう増やしていくか。輪番制も一つの方法かと思いますが、その11クラブは過去の経験から、活動の

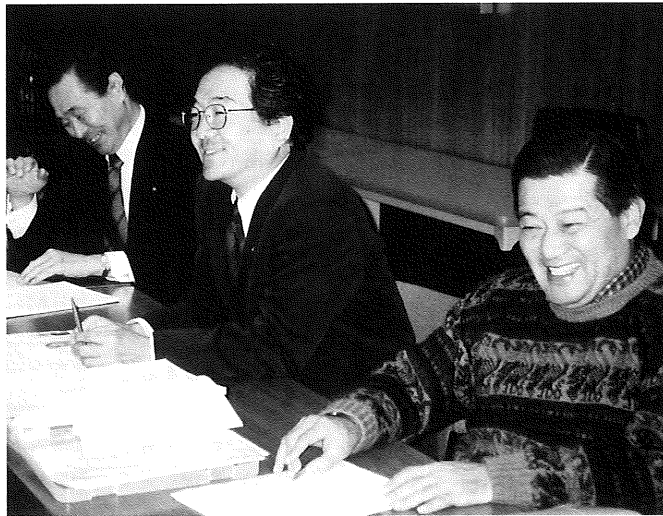


素晴らしいさをご実感いただいているから常に参加いただいているのでしょう。今後はぜひその喜びを、全79クラブで分かち合えればと思います。

服部：それから共同でホストをする、という方法もありますよ。2人しかホストファミリーの候補者がいなかったために諦めた、というクラブもあるようですし、他クラブと共同なら可能なわけですね。

森：私は初めてホストファミリーを探すお手伝いをしましたが、実は私自身、無理じゃないかと諦めていたんです。ところが意外にも、皆さんにお話したらご理解をいただけて、5名ほど手を挙げてくださいました。やっぱり情報不足も原因の一つじゃないかと思うんです。今までも委員長さんからお話があったはずですが、聞き流してしまっていたようです。こういう立場をいただいて、始めてしっかり聞くようになっただけで、これまで私自身もどこか無関心だったような気がしました。

大谷：あと子育てを終えたホストファミリーの例ですが、躰をきちんとしていただき、随分、手をかけてくださったんですね。そのおかげで学校側も大変、喜んだようです。ですから、そういうことで皆さんに協力していただくことが必要なんだと思いますね。



司会：それも経験されないと難しく感じられるようですが、実際は「当たって砕けろ」で解決することが多いみたいです。

鈴木：そうなんです。同年代の子どものいる家庭より、むしろ6歳ぐらいの小さな子どもの方が会話が通じる場合もありますし(笑)言葉の問題も、留学生が日本語を覚えるべきであって、基本的にホストファミリーは英語ができなくても構わないはずなんです。

安藤：ちょっと乱暴な言い方ですが、日本の家庭は留学生に親切すぎるのかもしれない。過剰にサービスして甘えさせてしまう。そうなるとますますホストファミリーによって格差も出てしまいます。

服部：その辺りは、春・夏の受入時のオリエンテーションでも同じレベルで扱うよう、ホストの方にはアドバイスしているんですが、クラブごとでも十分な事前の打ち合わせが必要かもしれません。

司会：またローテックスの方たちを広報担当として、

たとえば例会の卓話など活用される機会を増やしてみるのはいかがでしょうか。

大谷：ローテックスは362名おりますが、帰国後は大学に進学することもある、なかなか活用も難しいんですね。ですが、今後はもっと色々な方面で活用していく方針です。

黒田：最近、非英語圏が随分、増えてきています。例えばブラジルですとポルトガル語ですが、受入学生に何かトラブルが起こった場合、やはりローテックスを頼りにしたいという思いはあります。ですから彼らを組織化して、青少年交換委員会にさまざまなカタチで関係して欲しいと思います。

大谷：実際にローテックスを活用しているお話はよく耳にします。やはり中心になる子がしっかりしていれば、組織として上手い具合に機能していくんじゃないでしょうか。

黒田：本当に、帰国した彼らの目は輝いていますよ。

1年間が、それこそ何年間分もの成長の促進剤になっている、というのを会うたびに実感します。

服部：観光気分で行ける期間でもありませんし、向こうに行けば当然、日本の文化や伝統、政治経済など訊ねられる機会があります。そのために「まずは日本の事を勉強しなさい」と、派遣のオリエンテー

ションの際にも話すのですが、まさに「日本を知って世界を知る」素晴らしいプログラムではないでしょうか。

大谷：やはり青少年を育て上げる有意義な活動ですし、我々、委員のみならずロータリアン全員にとって誇り得るプログラムですので、どうぞ皆さん、この感激を共に味わっていただければと存じます。

インタビュー



さまざまな視点から、 国際親善の 意味を問いかける。

ロータリー財団学友会 代表幹事
古橋 武之氏

インタビュアー：地区スタッフ 前田 勝夫（月信担当）

PROFILE

1976年、ロータリー財団の第2回研究グループ交換（GSE）プログラムに参加。アメリカ・サンディエゴにおいて地域社会貢献事業、教育制度、医療制度、人種問題などへの取り組みを視察した。現在、社団法人中部産業連盟 主席コンサルタント・国際事業統括部長、として活躍。ロータリー財団では学友会幹事を18年間、さらに代表幹事を10年近く務める。（以下、敬称略）

前田：古橋さんは長く財団学友の代表幹事でいらっしゃいますが、ご自身もかつて、このプログラムに参加されたそうですね。

古橋：はい、31歳の時です。当時、ロータリー財団のお世話をされていた鮎谷バスターガバナーが世話人となり、第2回の研究グループ交換（以下GSE）に名古屋北ロータリーから参加させていただきました。

前田：どちらの国へ派遣されたんですか。

古橋：アメリカ・サンディエゴです。ちょうどベトナム戦争が終結した翌年の1976年で、日本では為替の自由化、オイルショックと続く、そんな時代でした。ただ、当時は外国旅行そのものが珍しかったですし、6週間ではありましたが、GSEでの経験を国際協力など私自身の仕事にも活かすことができたと思います。

前田：当時としてはいち早く、国際感覚を身につけることができた貴重なご経験でしたね。

古橋：じつは家内も奨学生で、学友会で出会いました。いちばんの収穫じゃなからうかと感謝してますよ（笑）

前田：いや、それは素晴らしい（笑）学友会のメンバーにはいろんな方がいらっしゃるんでしょうね。

古橋：メンバーは国際親善奨学生と専門職を持つGSEのOB、OGで構成されておりますので、教育、医療、音楽関係…皆さん多方面でご活躍されています。

前田：古橋さんご自身は、どんなお仕事呢？

古橋：中部産業連盟でコンサルタントを務めております。具体的には生産や物流システムなど、日本の製造業の改善活動を支援する仕事と、もう一つはODA、つまり途上国に対する協力が大きな仕事ですね。特に日本の経営管理技術を海外にご紹介する、ということでJICA（国際協力事業団）やAOTS（海外技術者研修協会）などの機関を通じて、専門家を派遣したり、海外から来る研修員を教育したり…。ですから、財団のプログラムとも共通する部分があるかもしれません。

前田：財団の親善奨学金プログラムは、古橋さんのような優秀な人材を育てる有意義なものだと改めて感じますが、そもそも親善奨学金制度の目的とは何でしょう。

古橋：やはり国際親善、それに尽きるでしょうね。奨学生には「1学年国際親善奨学生」と、奨学金が2年以上にわたり支給される「マルチ・イヤー国際親善奨学金」の2種類が用意されています。その対象者は大学を卒業し、さらに1年間、もしくは2年間、財団が指定する海外の教育機関で学ぼうという若い人のための制度です。それとは別に、専門職につく社会人を対象に、6週間の海外研修を行なうものが研究グループ交換、つまりGSEですね。ただしいずれも、若い人材を親善使節として海外へ派遣することを目的に始まったプログラムであり、もともとは学位取得のためのものではありません。

前田：だとすると2年間というマルチ・イヤーは、長いような気がします。

古橋：そうかもしれません。ただ学位取得をめざす学生の応募が多いのも事実で、それにはやはり1年間では短すぎる。そうした奨学生の声に応えるカタチで、当地区では1994年からマルチ・イヤーの制度も設けられました。

前田：奨学生の派遣自体はいつ始まったんですか。

古橋：当地区では1958年です。GSEは1974年からで、私が2回目の派遣です。当時は派遣と受入を隔年で行っており、2002年度から同年に変更されました。

前田：GSEでは派遣メンバーや派遣先を選ぶのに毎回、ご苦労があるようですね。

古橋：ええ。派遣チームは、リーダーとなるロータリアン1名とメンバーが5名。全部で6名で構成されますが、付き添うロータリアンは6週間、日本を離れなければなりません。しかも旅行の手配などの事前準備も大変で、ロータリアンへの負担が大きいです。ですから、このプログラムを円滑に運営しようとするなら、やはり企画の持ち込みから手配まで、すべて参加するメンバー主導で行なうべきかと私は思います。ロータリー側は、あくまでもスポンサーという立場で側面からサポートする。その方がずっと、若い人材に異文化や職業交流の機会を与えるGSE本来の趣旨に近づくんじゃないでしょうか。

前田：おっしゃる通りかもしれません。ところで学友数はどのくらいですか。

古橋：2002年5月の時点で親善奨学生が284名、G S Eが23名の合計307名です。

前田：奨学生が圧倒的に多いですね。

古橋：全体の90%以上を占めています。

前田：先ほど、親善目的に尽きる、とおっしゃられましたが、学友のメンバーたちの意識はどうなんでしょう。

古橋：率直に申し上げれば、やはり彼らの多くは学位取得がメインの目的でしょうし、数ある奨学金制度のOne of Themになってしまっている傾向があることは否めません。ですが、そうであってはいけません。ロータリーの奨学金制度は、あくまでも国際親善を目的とするものですし、ロータリーならではの素晴らしい特色も備えています。我々自身が何をもちて国際親善とし、どう実行すべきかを今一度、議論すべきでしょう。

前田：それは派遣された学生に、親善使節としての立場をいかに認識させるか、ということでしょうか。

古橋：それもありますが、しかしこの奨学金プログラムというのは、学生だけが行なう国際親善ではないんです。

前田：と、申しますと？

古橋：各奨学生には派遣する側、つまりスポンサー地区と受け入れる側のホスト地区の双方でカウンセラーとなるロータリアンが任命されますが、そのカウンセラー同士、つまりロータリアン同士が奨学生を媒介にして、自分たちも国際親善を行なう、そういう意味合いもあるんです。奨学生が現地で順調に過ごしているか。そんなやりとりを通して、自ら積極的に交流を図るロータリアンもいらっしゃいますが、自分たちも国際親善するんだ、とさらに意識できるようになれば理想的じゃないでしょうか。

前田：即ちロータリー4番目の綱領にあたる部分ですね。

古橋：はい。また、奨学生の派遣先ですが、やはり国際親善という奨学金制度本来の目的からすれば、もっと幅広く世界に枠を広げることも課題じゃないかと思います。

前田：現状、どこかの国に偏りがあるわけですか。

古橋：親善奨学生284名のうち、北米が54%、ヨーロッパが41%と両方で95%を占め、アジアや中南米はほんのわずかです。希望者は優秀な方が多いだけにハーバード、マサチューセッツ、ロンドン、パリ大学…そうした名門大学に集中してしまうことも無理のない話ですが、ロータリー側がイニシアティブをとり、北米は何名、アジアは何名と先に枠を設けて募集していくカタチにしていけば、国際親善という部分が前面に出てくるでしょうし、プログラムの趣旨も活かされるんじゃないかと思うんです。

前田：なるほど。あらかじめ枠を決めておくことで集中を避け、その分、派遣国を拡大したら、というご提案ですね。その方が親善目的も伝わりやすいでしょうし、学位取得を主眼に置く学生だけでなく、より幅広い人材にチャンスを与えることにもつながるかもしれません。

古橋：ええ。大学についてはR Iの推薦枠もありますし、むしろ、ロータリーがいくら推薦したところで大学側が本人を受け入れてくれるかどうか、という問題もあります。そのため選考後に奨学金を辞退するケースも起きており、本来の目的を伝えるどころか、One of Themと思われても仕方ないんですよ。

前田：そうした事態のないよう情報発信の方法も、見直さな

ればならない一つでしょうね。

古橋：はい。現状は大学へのポスターの掲示とか、口コミが主なチャネルではないでしょうか。ホームページをさらに充実させ、たとえば学友の声で広く社会へ向けて情報発信することも必要かと思います。

前田：学友の活動としては、やはり彼らの経験をもとにした情報発信がメインとなるんでしょうか。

古橋：奨学生に関しては、先ほど申し上げたホームページ上での情報発信、新規奨学生のためのオリエンテーションやガイダンスへの協力、名簿の維持が主な活動内容ですね。たとえば、大学での選考にどうパスするか、そうした具体的なノウハウを伝えられるのは学友しかおりませんし、彼らの経験は次の奨学生に活かされているわけです。ただ、今後は各ロータリークラブで卓話をさせていただくことも彼らの役割の一つではないかと考えています。思えば、これも彼らを通じての立派な国際親善なんです。

前田：確かにそういう活用の仕方もありますね。

古橋：そのためにも派遣国に偏りがいい方がいいわけです。我々としては帰国後、最低でも5回は卓話をしよう、と目標を決めたところなんです。

前田：4週あるうちの全部は無理でしょうが、せめて月に1度、そうした機会を設けることはロータリアンにとっても国際理解を深めるいいチャンスになりますね。

古橋：基本的には帰国直後の15名程度をリストアップしておりますので、リクエストさえいただければ、日程の調整はこちらで行なう予定です。

前田：これまで学友会のメンバーに卓話をさせていただく機会はありませんでしたが、それも個人レベルでお願いするだけでした。そうしたシステムチックな流れができれば、どのクラブの方も利用しやすくなることでしょ。

古橋：正直なところ、学友とロータリーがどういう関係を築けばいいのかわかりませんが、これまで議論されることがなかったんです。若い奨学生にしてみれば、自身の目的を達成すればいいわけですし、ロータリー側もシャイと申しますか、彼らに要求してこなかった。ただ、奨学生にはいつでも協力しますよ、という人は大勢いるわけです。横浜や大阪、京都あたりは学友をうまく活用しているようですが、この地区では、お互いにPRが不足していたのかもしれない。

前田：帰国後は就職などで、この地区を離れてしまう方もいらっしゃるようですが。

古橋：はい。一旦帰国し今度は自費留学される方、別地区に行かれる方もあって、15名という卓話者も過去3年に遡って確保できた数字です。ですが彼らが5回、卓話を行なえば全79クラブをほぼ回れるんです。

前田：地区で作成した卓話者リストに加えるといいかもしれませんね。

古橋：どうぞ宜しくお願いします。今後、派遣前のガイダンスでは、帰国後の後輩へのオリエンテーション、地区のロータリーに対する貢献をより一層、明確に伝えていきたいと思いますので、ロータリアンの皆様にはぜひ、学友というネットワークをフルにご活用いただければと存じます。

前田：本日はどうも有り難うございました。

青少年交換受入留学生アンケート

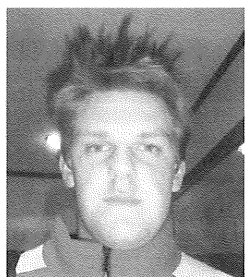
その1

当地区では今、外国から11人の高校生を交換学生として、1年間お世話しています。下記のアンケートに頑張って日本語で回答してくれました。元気な親善特使の活躍ぶりを感じ取って下さい。(以下、敬称略)

クリステン・ヒアース

- ①1985年6月29日生、17才
- ②アメリカがっしゅうこく
- ③だいい6290ちくトラヴァースしRC
- ④だいい2760ちくせとRC
- ⑤せいカピタシオじょしこうとうがっこう
- ⑥こうじょうがいっぱいでくうきがよごれているとおもっていました。
- ⑦日本はこんざつしていますがそんなにくうきはよごれていませんでした。
- ⑧いろんなことをみたりけいけんしたりしたことです。おてら、のう、かぶき、いけばな、おちや、びじゅつかんなどです。
- ⑨さいしょ日本のしゅうかんになれるのにすこしまりました。おはし、おじぎ、いつもくつをはきかえることなどです。
- ⑩えいかいわクラブ (E.C.C.)、びじゅつクラブ、Sクラブ (ソロブケミスト)
- ⑪わたしのたんになははったせんせいです。えいぶんぼうのせんせいです。オーストラリアで1ねんかんえいごをべんきょうされたそうです。

★★★★★★★★★★★★★★★★



グレゴリー・ギブソン

- ①1985年12月4日生、17才
- ②カナダ
- ③Victoria-Harbairside RC
- ④Nagoya-Osu RC
- ⑤めいとうこうこう
- ⑥日本にくるまえにもっていた

日本のイメージは日本のおんなの人はいつもきものをきていたとおもいました。

- ⑦日本にきてから日本ごはなせることはむずかしくてたいへんだとおもいます。
- ⑧日本にきてうれしかったことはひろしまいったこととたんじょうびパーティをしたことです。
- ⑨もんだいはありません。
- ⑩バスケットぶです。
- ⑪みやしたせんせいはやさしくておなじクラス人にて

つだってあげることをきいていました。えのきせんせいはやさしくて日本ごのじゅうぎょうてつだってくださっています。

★★★★★★★★★★★★★★★★



メルリン・スダット

- ①1984年2月21日生、18才
- ②アメリカ
- ③フェイエットビルRC
- ④いちのみやきたRC
- ⑤いちのみやこうこう
- ⑥日本は木とおんなの人のきも

のとこのせんどう (ふねをこく)。日本人はでんしこうがくをせんどうします。だからたくさんでんかせいひんがやすいとおもいました。わたしは日本をなにもしりませんでした。

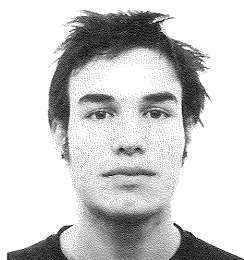
- ⑦わたしはまちがっていました。すいぼくがでみたようにけしきがきれい。でももっときれいなものをつけた。はなやのおんなの人のえがお。そしてかぞくとせんせいとともにだちとみなのはげましとしんせつです。日本はすばらしいです。
- ⑧わたしのともだちにえいごをおしえるとき。わたしのははにおはなをわたすとおどろいてよろこびます。わたしはあたらしいなにかをならいます。わたしはすもうをみたり、アイスクリームをたべたり、からてをしたりします。そのときわたしはいつもうれしいです。
- ⑨わたしのはじめの1しゅうかんはたくさんもんだいがありました。わたしはみちにまよったときおかねがありませんでした。いしゃへいきました。日本ごをはなしませんでした。でもわたしはおかねをえましたとわたしはなおりました。わたしは日本ごがいちばんとくいではない。でもわたしはまえよりはなせるようになりました。
- ⑩わたしはたくさんクラブをほうもんします。たとえはすいえいとけんどうとさどうとえいごです。つぎはいけばなです。こうしてわたしはたくさんあたらしいものをこころみます。そしてたくさんあたらしいひととしりあいます。

アンケート 内 容

- ①生年月日、年齢
- ②母国名
- ③スポンサー R C
- ④ホスト R C
- ⑤通学高校
- ⑥日本にくるまえに持っていた日本のイメージ
- ⑦日本に来てからかんだ日本の印象
- ⑧日本に来てうれしかったこと
- ⑨日本に来てこまったこと
- ⑩所属クラブ活動
- ⑪担任の先生を紹介して下さい

⑪わたしのたんになのせんせいがみうらせんせいです。かのじょはえいごのリーディングをおしえます。かのじょはわたしがとしょかんでほかのせんせいにほんごをおしえてもらえるようにじかんわりをくんでくれました。わたしはしゅうに10じかんとしょかんです。いちのみやこうこうのせんせいはみんなとてもねっしんにわたしをたすけてくれます。とくにかわいせんせいです。かれはわたしにすうがくをおしえるためにえいごをべんきょうしています。だからわたしはすうがくをべんきょうできます。かれはえいごをまなびわたしはすうがくのかんじ（あかだま、しろいたま、かくりつ、一ぱんこう、とうさすうれつ）をおぼえます。

★★★★★★★★★★★★★★★★



デビッド・ショーム

- ①1984年9月13日、18才
- ②アメリカ国 アリゾナ州 ユマ
- ③ユマロータリー
- ④あまロータリー
- ⑤愛知高等学校

⑥ニューヨークのようにたかいたてものがおおいとおもっていた。

ごはんを一日三かいたべる。

はやくちでしゃべる。

かがくぎじゅつがすすんでいるきびしい。

⑦ひとくるまもおおくにぎやか。

みんなしんせつ

たべものはおもっていたよりおいしい

にほんごおもっていたほどむつかしくない

⑧いろいろなひとにあいたくさんともだちができていしょにあそんだこと

⑨にほんごがまだよくはなせないのでもいごになった

⑩からて、りくじょう、ラクービー、しょどう、りょうり

*しりつのだんしこうでクラブがたくさんある。せんせいともだちもしんせつ。こうそくはきびしい。そうとうしゅう（ぜんしゅう）のがっこうだ

からふっきょうにきょうみがある。

★★★★★★★★★★★★★★★★



エリナ・コヴォネーノ

①1985年3月2日生、17才

②フィンランド

③Lanti-joutiarvi R C

④江南 R C

⑤びほく高校

⑥日本ではれいぎただしいがと

てもたいせつです。日本の人たちはとてもはずかしがりやです。ともだちをつくるのはむずかしいです。日本の人たちは外国人あまり好きではありません。日本の高校生はとてもたくさんのべんきょうしています。

⑦日本の人たちはとてもやさしいです。外国人にきょうみがあります。日本の人たちせいようしょく大好きです。日本の学校は楽しいです。ともだちをつくるのはかんたんです。日本の高校生はいつもかっぱつです。

⑧私はまだちょっとだけ日本語わかります、けど日本人は私にゆっくりはなします。日本のぶんかはとくしゅなぶんかです、だからおもしろいです。日本語もおもしろいです。日本の食べものはとてもおいしいです。いちばん好きなのは日本の人たちです。

⑨学校の中はさむいです。学校にはたくさんのおかしいきそくがあります。たとえばアクセサリーはだめです。日本では女の人のちいはひくいです。

⑩さかどうクラブ、英語のLL、すうがく

⑪おぜき先生はわかい女の人です。おぜき先生はふたりの子どもがいます。かのじょは日本語の先生です。私はほんとうにおぜき先生が好きです。かのじょはとてもやさしいです。おぜき先生はいつも私に日本語ではなします。もし私はわかりません、おぜき先生は英語ではなします。おぜき先生はきびしいではありませんむしろしんせつです。だからみんな学生はかのじょが好きです。おぜき先生は私にフィンランドの先生より近くにいます。

第 二 回

ROTEXの集い

R I 青少年交換委員会 在日委員 ROTEX担当 神田 憲

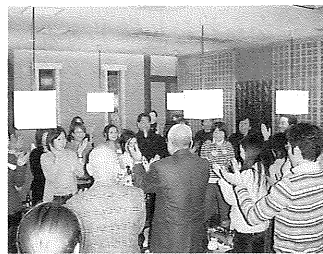


本年4月26日・27日に開催される青少年交換プログラム全国会議の第10回ロータリー青少年交換研究会『青森会議』にて、ROTEXの全国組織化が計られます。

この研究会にはビチャイ・ラタクルR I会長も参加をされます。

それに先立ち、昨年8月24日当2760地区のROTEXの会を立ち上げました。12月23日には岡部快圓ガバナー・伊藤 宏地区幹事・木本精之助・林 光雄元委員長をお迎えして『第二回ROTEXの集い』をチェリープラザにて開催しました。

大谷和雄委員長の挨拶で始まり52名の参加者全員に思い出を語って頂きました。34年の歴史をもち、362名のROTEXを輩出しております当地区の青少年交換プログラムで、同じ留学経験をした者同志であり参加者の年代(10代～40代)を超えた熱き語らいは懇親会に移り、より楽しく素晴らしいものとなりました。(以下、敬称略)



高 須昭彦 医師

1972年 Australia派遣
スポンサーRC：一色、日進市在住

交換留学生として、オーストラリアに1年間滞在してから、30年という歳月が流れました。今でも、大切に保存している日記は、1972年3月6日から始まります。そこには、希望、期待、意欲とともに、失意、後悔といったネガティブな感情も含め、あおくあおく綴られています。

私たちの高校時代は、60年代の学生運動が丁度おさまってきた頃ですが、それでも、そのなごりが雰囲気の中にあっただように思います。高校の進学、大学の受験といった、いわば「体制」から飛び出すことへあこがれ、交換留学生募集の張り紙をみて、さっさと自分で申し込んだのを覚えています。

失意や後悔も、もちろんあったけれど、留学の経験は、何よりも自分で選択した道であったし、それからの人生にとっての心のよりどころとなってきました。このような経験をさせていただいたロータリークラブに感謝するとともに、海外での経験を望む若い方に、心からエールを送りたいと思います。

宮 下 (旧姓 水野) 教子 塾講師

1989年 USA派遣
スポンサーRC：高浜、碧南市在住

先日行われたRotexの会に出席し、久しぶりに交換留学生として過ごした1年をしみじみと振り返りました。

留学中の一番の思い出は、ホストファミリーとの日々の生活です。老夫婦二人暮らしだったせいもあり、ホストチェンジをすることもなく、1年間1件の家でお世話になり、今でも私の心の定点はアイダホのあの家にあるような気がするほどです。

この1年が素晴らしく、「ロータリーで留学」ということの安心感から、その5年後、今度は国際親善奨学生としてドイツに留学させていただきました。不穏な空気の漂う現在の国際事情ですが、私や、他の留学生にとっても、1年を生活した国は、家族や友人の暮らす国です。世界各地にロータリーのこういった想いがつながっていくことで、少しでも世界平和が実現されるよう、少しでも尽力できればと願っています。

鈴木 (旧姓 吉野) 美和 主婦

1990年 USA派遣

スポンサー R C : 小牧、大阪在住

2002年12月23日、2760地区第2回Rotexの集いが開催されました。この会結成に当り2年越しで、1968年以来2760地区より派遣された私達、362名の青少年交換留学経験者の所在を調べて頂いた上での開催でした。

私は1990～91年、アメリカ・ウィスコンシン州のSlingerという当時の人口1600人程度の小さな町へ留学させて頂きました。そこで過ごした1年は私にとりかけがえのない出会い・経験を与えてくれました。できるならあの頃にもう一度戻りたいと常々思っております。

Rotary青少年交換プログラムを通して、私達は素晴らしい経験をさせて頂きました。今回、Rotexの集いに参加させて頂き、これからは私自身がそのお返しをしなければいけないと痛感致しました。

最後になりましたが、青少年交換留学を支えて下さっているロータリアンの皆様へ、心より御礼を申し上げます。

河合沙織 東京外大在学

1998年 Brazil派遣

スポンサー R C : 田原パシフィック

ROTEXである私達はこのプログラムを通じ、それぞれの派遣先で、言語や文化、生活習慣、歴史など非常に多くのことを学び、感じてくることが出来ました。

このような経験が、各自の人生に大きな影響を及ぼしていることは言うまでもありませんが、それ以外にもそれぞれの経験を生かした活動をするにより帰国後もこのプログラムに関わって行けるのではないかと考えます。例えば、言語力を生かして、来日留学生、ホストファミリー等をサポートすること、派遣候補生に対するアドバイスなどが可能だと思います。特に来

日留学生や派遣候補生に対しては、日本と派遣先の二つの国での生活を体験していることに加え、“ロータリー留学生”という共通項があるからこそ出来る手助けも考えられるので、彼らに与えられた貴重な機会をより有意義なものにしてもらうようサポートして行きたいと考えております。

各方面からのニーズに反映した活動を実現させるために、考えて行かなければならない課題はたくさんありますが、貴重な機会を与えて頂いたこと、それに関する全面的な協力に対する感謝の気持ちを少しでも今後の青少年交換留学プログラムにフィードバックして行けるような活動を目指して行きたいです。

ROTEXの活動に関して、ロータリアンのみなさまによるご理解とご協力が頂ける様、全力で頑張っていきたいと思います。

(2760地区 ROTEX代表)

村瀬智子 国際基督教大在学

1999年 France派遣

スポンサー R C : 江南

私はこの地区で初めてフランスに派遣させて頂きました。ボルドー近郊のLaReoleはブドウ畑がどこまでも続く田舎町です。ボルドーはワインで有名な都市ですが、日本人観光客は少なく、まして私のまわりは、日本人に初めて出会ったという人ばかりでした。

ですから日本語は勿論、英語も通じないこともあり、初めはコミュニケーションに苦労しました。学校でも、私は日本人第一号で、日本の紹介をすることも多くあったのですが、紹介のために日本のことを調べるたびに日本のことを知らない自分に恥ずかしくなりました。

様々な場所であった友人、知人とは今でもよく手紙のやり取りをしています。フランスに行って良かった、現在、大学では英語が中心で、フランス語を使う機会はあまりありません。もしほかの国へ行っていたらフランス語を学ぶ機会も友人を得る機会もなかったかもしれない。素晴らしい体験をさせていただいたロータリーの皆様に感謝いたします。

ROTEX (ローテックス) とはROTARY EXCHANGEESのROTとEXを繋ぎ合わせた言葉でRotary青少年交換留学プログラムでの留学を終え帰国した諸君のことを言います。

当2760地区では帰国後自動的にROTEXの会に入ります。

一人でも多くの若人(高校生)がこの素晴らしいプログラムで世界に羽ばたいてほしいと、青少年交換委員会は願っております。

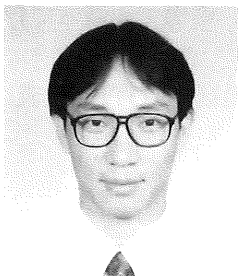
e n q u ê t e

米山奨学生 アンケート

NO.1

当地区では我々が応援する43名の米山奨学生が頑張っています。その皆さんに昨年末下記のアンケートをしました。順次ご紹介します。(以下、敬称略)

- ①生年月日、年令
- ②母国名
- ③世話クラブ名及びカウンセラー名
- ④通学大学、専攻(主たる研究)
- ⑤来日前に持っていた日本のイメージと来日後の日本の印象
日本に来てうれしかったこと、日本に来て戸惑ったこと。
奨学期間終了後、どんな将来計画をお持ちですか。



康 林

- ①1963年9月10日、39歳
- ②中国
- ③名古屋北RC、渡邊 嘉昭
- ④中京大学大学院文学研究科博士課程二年

川端康成を始め、日、中新感覚派文学の比較研究

- ⑤来日前、日本に留学している友人から、こんな話を聞いた。彼は進学のために、ある日本人教授を訪ねた時、次のように言われて断わられたと言う。

「君たち中国から来た留学生は、日本へ来ると勉強せずに、アルバイトするばかりで、学習に熱心な者はほとんどいない。たまに熱心な学生がいたかと思うと、アメリカへさっさと行ってしまった…」

その時、日本へ親近感を持ちつつ、中国の大学で十何年間も日本文学を学び、講義もしてきた私にとって、この友人の話はショックが大きかった。

さて、わたしが日本に来てもう四年間経った。この間に、どうしても忘れられない事があった。それは、今の私立大学の指導教官のもとで勉強して、二年後のことだ。修士課程を終えた私は、経済面の事情で国立大学に進学しようと思った。この思いを先生に伝えると、先生の顔色は変わった。

「残念だ。せっかく一人の、研究意欲のある学生と出会って、自分の知識をすべて植え付けようと思ったのに…」

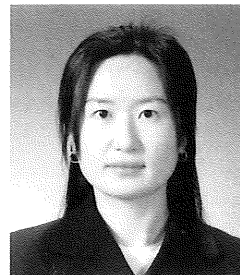
しばらくの沈黙。

「もしただ経済面の問題ならば、何とかするよ。」先生は私を育てていく計画さえ、話してくれた。

私は涙が流れそうだった。

米山奨学生のお蔭で、今私は先生の計画の通り、勉強を進めている。出来るだけ早く博士号を取得し、

中国に戻ってもう一度大学で教鞭をとる予定にもなっている。その際は、学問的な方面は勿論のこと、日本で経験したことを生かし、日中両国国民の理解をより深めるために、微力を尽くしたいと考えている。



金 秀英

- ①1967年8月1日、35歳
- ②韓国
- ③名古屋名駅RC、増田 裕
- ④名古屋外国語大学、日本語教育

- ⑤私が初めて日本に来たのは今から11年前の1992年8月でした。その時はちょうど日本のお盆休みの時期で、どこに行くにも人であふれていました。ほんの数時間前まで私がいた海の向こうでは終戦記念日の行事とかで国中が「戦争を忘れてはいけません」モードでいっぱいだったのとは比べてみると、日本のこの静けさはなんだろうと、両国の戦争に対する認識の差に少し戸惑いを感じたことを今でも覚えていました。その翌年から留学で再び日本に来ることになり、日本での生活に1日でもはやくなれるために必死で頑張りました。日本での留学が決まった時、回りのみんなは、私が韓国人であるがために受けるかもしれない不都合について心配してくれました。しかし、実際に日本で暮らしてみると、それが危惧に過ぎなかったことが分かりました。日本での滞在が長くなるにつれ、いろんな出会いがあり、そのたびに勉強になったり、自分なりにいろいろ考えさせられたりもしました。

日本に来てうれしかったことは、このような出会いを通じて、韓国いたら会えることがなかったと思う

大切な友達をたくさん得ることが出来たことです。私の一生の宝物を。

来年で長い長い学生生活に終止符を打ち、私もいよいよ一人前として、今まで勉強したことをどこかで還元できるようになるかもしれません。私はこの10年間の留学生活を通して、かけがえのないものをたくさん得ました。そして、私が留学先と選んだ国が他の国ではなく、日本だったことをとても嬉しく思います。今後は、日本と韓国の掛け橋となり、両国がもっと分かりあえるように努力していきたいと思っています。



羅 婷婷

- ① 1973年11月4日、29歳
- ② 中華民国（台湾）
- ③ 岩倉RC、夫馬正夫
- ④ 名古屋大学大学院 文学研究科、日本近代文学

⑤ 来日前、日本に対するイメージは母国で受けた歴史教育の影響の下で膨らんだものでした。明治維新以来、「脱亜入欧」を目指した日本は、頭の回転が速く、常に積極的に「近代化」を取り入れようとする国だと思っていました。また、戦後、急速に経済大国と呼ばれるまでに発展を成し遂げたのは、日本人の団結心の強さによるものだと考えていました。しかしながら、これらのイメージは来日後、観察と理解により少しずつ変わりました。日本は確かに上手く「近代化」を取り入れ、成功した国ですが、伝統や「和の心」も大事にしてきた国だと思います。例えば、祭りの多い夏、大人から子どもまで街の人々が毎年行う伝統行事をウキウキしながら準備し、汗、笑顔一杯で楽しむ姿が非常に印象的です。また、和紙やそば作り等の職人さんが社会的に尊敬される職業ということも印象的です。一方、戦後の経済発展には、やはり日本人の団結心は欠かせない、大きな要因の一つだと思います。しかしながら、いわゆる「年功序列」制度により、会社の発展が自分の生活と深く関わるようになっていたことで、皆が我慢強く頑張ることができたことも大きな要因でしょう。また、アメリカの原爆投下の憤りからくる、日本への援助も大きかったでしょう。これは、日本政府が今日でもアメリカに好意を示し、全てに協力的な姿勢を見せる背景なのではないでしょうか。

ところで、母国を離れ日本に留学ができ、物事の考え方により多面的で国際的な視野を養うことができたことが日本に来てうれしかったことです。そして、

日本に来て戸惑ったことと言えば、日本における我が母国－中華民国に対する情報の少なさです。これは、寂しいことですが事実です。この状況が日本だけのものではなく、権力構造による国際情勢の反映とは言え、台湾人として生まれ育ち、我が故郷を愛しく誇りを思う自分にとって、この問題はどうしても思考せずにはいられない寂しい現実です。平和、共存のある国際社会の実現には、単に強弱を強調することよりも、お互いに友愛、好意の気持ちを持つことこそが大切で必要なのではないでしょうか。

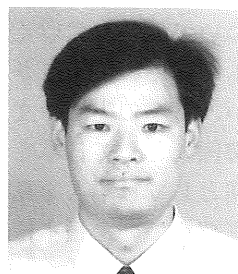


王 輝

- ① 1973年3月4日、29歳
- ② 中国
- ③ 瀬戸RC、石川摠輔
- ④ 名古屋大学大学院経済学研究科経営専攻（企業の戦略と組

織のあり方）

⑤ 来日前、中国の大手企業で働いたことがあります。当時ではたくさんの日本企業と取引があったため、日本人に対してとくに悪い印象はなかったです。日本に来た後、生活の中や日本人とのコミュニケーションの中、日本人の心優しさを改めて感じるようになりました。日本に来て嬉しかったことは、自分の専門の知識を身に付けただけでなく、日本人と交流もできて、日本の文化や歴史などについての勉強もできました。日本に来て戸惑ったことは最初に日本語が分からなかったことです。奨学期間終了後、自分が何の仕事をやっても、日本と中国の間の架け橋になりたいです。日本と中国は永遠に友好していくため、微力でも努力したいと思っています。



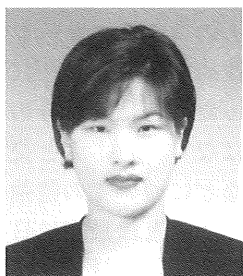
王 道海

- ① 1974年3月16日、28歳
- ② 中国
- ③ 名古屋千種RC、石黒正則
- ④ 名古屋大学大学院理学研究科

反応有機化学研究室、修士課程2年（金属錯体による触媒的アルコール類の酸素酸化）

⑤ 私が日本に来てから四年の年月が流れました。最初は日本語がわからず、異国の地で戸惑うことばかりでした。自分の生まれた中国とは全然違った生活、文化にあるときにはショックを受け、故郷に帰りたと思った日もありました。でも、まわりの人達と

交流をかわし、たくさんの温かい手助けのおかげで、今日本で多くの友達、知人を作ることができました。これは私の一生でかけがえのない宝物です。また、昨年ノーベル賞を受賞されました野依先生の研究室に入り、先生の研究室で勉強させていただくことができ、化学の知識も深めることができました。このことは私の人生の大切な経験であり、大きな影響を与えていると思います。そして、この自分が中国で暮らしてきた頃とは、全く違う、とにかくがむしゃらな生活は、良い意味で、私の人生に広い視野を与えてくれたものと思います。とくに研究室の北村先生をはじめとする日本の諸先輩方はとても真面目で、何も知らなかった私に、親切でいねいに御指導してくれました。朝早く来て、夜遅くまで研究に打ち込むその姿は、皆さんの化学に対する情熱がひしひしと私に伝わってきました。まだまだ、有機化学をはじめたばかりの私にとって大きな刺激となりました。諸先輩方のそのような熱い姿を見ると、日本の将来を支える研究者になることが間違いないと思います。私も彼らにまけないように化学の勉強を頑張らないといけないと思います。



李 正連

- ① 1972年 6月15日、30歳
- ② 韓国
- ③ 名古屋中 R C、上田和男
- ④ 名古屋大学大学院、教育学 (社会・生涯教育学)

⑤ 韓国は、他の国より日本との深い関わりをもっており、韓国で長い間教育を受けてきたかつての私にとって、日本は憎しみの存在でもあり、同時に学ぶところが多い先進国でもあった。しかし、日本語を習い始め、戦後及び今日の日本について勉強していく中で、その先入観は少しずつなくなっていった。さらに、心の温かい日本人に出会い、日本の生活や文化に直接触れることによって、韓国人として日本を見るのではなく、一人の同じ人間として日本人を見るようになり、従来韓国人として持っていた日本に対する反感はなくなった。

このように日本に来てから、日本に対する自分の価値観が変わり、また、逆に韓国及び世界に対する一層客観的な視点を持つことができたのは、個人的に大変うれしいことである。それから、優しい友人や先生、その他いろいろな方々に出会ったことによって、結局、国が問題ではなく、一人ひとりの人間を尊重し、大切にすることが、お互いの距離を縮むこ

とができ、平和になれるという真理を改めて実感するようになったことも日本に来てからの大きな収穫である。

将来には、このように自分が感じたことをなるべく多くの人に共有してもらうために、日本と韓国を問わず、より深度のある研究活動ができ、またその結果を教えることができる分野に進出したい。また、現在日本と韓国が互に抱えている共通的な教育問題を解決するために、教育分野における日韓の掛け橋的な活動していきたい。

許 京蘭



- ① 1969年 6月28日、33歳
- ② 中国
- ③ 名北 R C、北村紀子
- ④ 名古屋大学、内科系
- ⑤ 日本に来る前の日本について

の情報は本や雑誌、テレビ、映画などで仕入れていました。経済的に発展していて、生活がとても便利で、高層ビルがいっぱいあって、道もきれいで、女の子がおしゃれで世界のファッションリーダーの国だという印象でした。その反面、仕事場では堅いサラリーマンばかりで、ユーモアがない国だとも思いました。日本に来てみると、日本人は確かに仕事熱心で、自己鍛錬の精神に富んで、私が思った以上に責任と信頼とプライドをもって真面目に仕事をしています。でも、個人の付き合いやテレビの番組とかCMから私はユーモアに溢れている日本人の仕事場での厳しさとは違った面に驚きました。

日本に留学して私が得たものは多く、嬉しいものです。日本語が上達したこと、色々な国内医学会、国際医学会に参加できたこと、ロータリーの奨学生に選ばれたこと、色々な方に出会ったことなどです。日本に来て異文化の違いで、戸惑ったこともありました。例えば、夜遅くまで、休みの日にも実験をやっているのに先生から「頑張ってね！」といわれた時、私は自分の努力がたりないかと反省したこともありました。日本での嬉しかったことも辛かったことも私の人生においての宝物となることで、この体験を大事にして、これからの人生を充実させて行きたいと思います。

確実な将来計画はありませんが、時にはアメリカに行って自分の研究分野の専門を一層高めたいし、時には日本で習った知識を日本で生かしてみたいし、時には中国に戻って臨床医師になりたいという気持ちがあります。

それぞれの民族衣装を着て参加!!

米山奨学生・学友合同忘年会報告

平成14年12月23日

於：ホテルキャスルプラザ

米山学友委員会委員長
鈴木 茂久



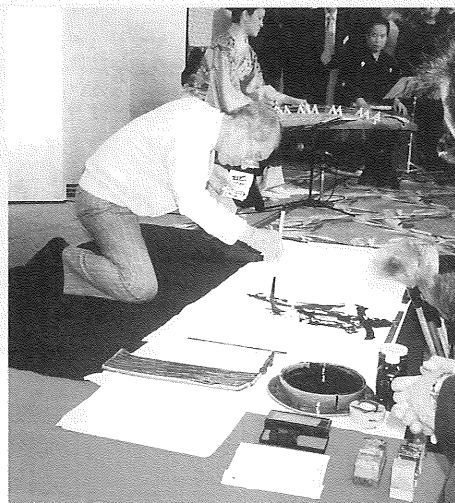
岡部ガバナー、豊島ガバナーエレクト、大森ガバナー補佐、浅井米山担当地区副幹事、森田次期米山担当副幹事、加納泉米山記念奨学会理事、の皆様方のご同席のもと、米山奨学生とご家族40名、カウンセラーの方18名、学友会とご家族の方53名、地区米山・学友委員会とご家族の方13名・総数130名の賑々しい会でした。

今回は「日本の文化」と題して、藤井養堂先生（米山学友委員）の気迫のある揮毫を見せていただくことを軸に、原田きよか先生のお琴と戸田遊山先生の尺八のすばらしい演奏を聴かせていただきました。皆様、プロ中のプロの方ですので、米山奨学生・学友、ご家族の皆様にとって、思い出に残る日本文化の格調高い楽しい忘年会であったと思います。

お国自慢の民族衣装の中にもご婦人方の着物姿が美しく艶やかに目に映りました。

その後の余興も、歌あり、ピアノあり、ギターあり、と時の経つのを忘れ、全員参加のジャンケンゲームで盛り上がり、手に手つないでの大合唱でフィナーレとなり、お土産は藤井養堂先生の直筆の「夢」の色紙と、伊藤地区幹事様手作りのソフトケーキを大事に持ってお帰りいただきました。

この場をお借りして委員会の皆様に深謝いたします。

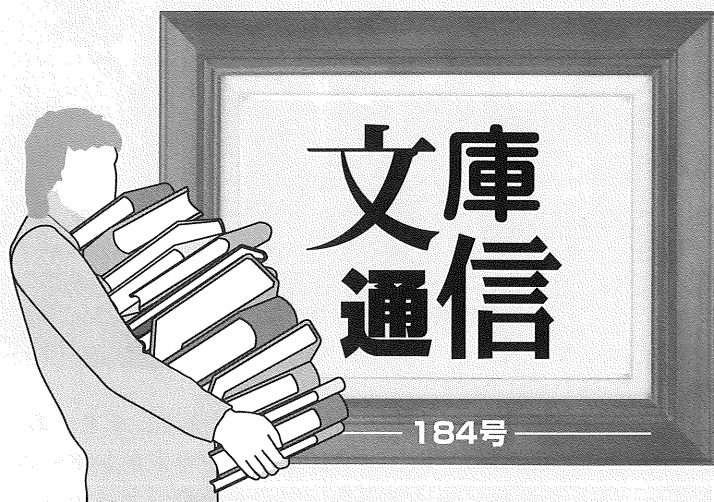


新しい仲間

片平 博己(江南)
小川 哲夫(名古屋西)
是枝 義人(名古屋西)

藤野 正敏(名古屋西南)
藤野 和裕(豊川)
田辺 一雄(岡崎)

土屋 延寿(岡崎)
徳田 重友(刈谷)
鈴木 清孝(西尾KIRARA)



「ロータリー文庫」は日本ロータリー50周年記念事業の一つとして、1970年に創立された皆様の資料室です。

ロータリー関係の貴重な文献や視聴覚資料など、1万9千余点を収集・整備し皆様のご利用に備えております。閲覧はもちろん、電話や書信によるご相談、文献・資料の出版先のご紹介、絶版資料についてはコピーサービスも承ります。

クラブ事務所にはロータリー文庫の「資料目録」を備えてありますので、ご活用願います。以下資料のご紹介をいたします。

ようこそロータリーへ

◎『ようこそロータリーへ
新会員へのオリエンテーション』

D.2650 2002 24 p

[申込先：瀬上勝夫 FAX (0779) 87-2560]

◎『ようこそロータリーへ』

D.2790 2002 27 p

[申込先：D.2790 FAX (047) 410-0776]

◎『ロータリー100年の歩み』

D.2700 2002 19 p

[申込先：ロータリー文庫]

◎『ロータリーに憶う一言・一句』

田中 弘 1999 6 p

[申込先：ロータリー文庫(コピー)]

◎『ロータリーの道しるべ』

長崎南RC 1987 128 p

[申込先：長崎南RC FAX (095) 826-4756]

◎『ロータリー雑学のすすめ』

長崎南RC 1996 86 p

[申込先：長崎南RC FAX (095) 826-4756]

◎『ロータリーの心をあなたも

—入会のお誘い—』

D.2650 2001 24 p

[申込先：D.2650 FAX (0742) 25-2651]

◎『アイウエオ!!』

—ロータリーの心と人生のイロハ—』

小林 博 2002 4 p

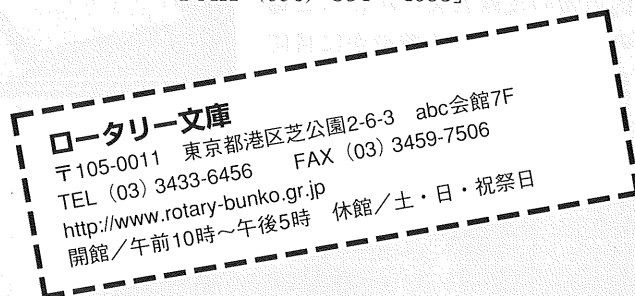
[申込先：D.2510 FAX (011) 222-1526]

◎『ロータリー情報集』

熊本グリーンRC 2002 317 p

[申込先：熊本グリーンRC

FAX (096) 354-4053]



訃報 謹んでお悔やみ申し上げます

松井 哲 様(名古屋南)
平野 紀子 様(名古屋西南)

松沢鉄太郎 様(あま)
斎田 章孝 様(常滑)

井上 滋 様(瀬戸)
村瀬 彬 様(稲沢)

会員数及び出席報告 (平成14年12月分)

分 区	クラブ名	会 員 数		入 会		退 会		例 会 数	12月 出席率	女 性
		2002年 7月1日	2002年 12月末日	12月	累計	12月	累計			
南 尾 張 分 区	半 田	70	70	1	1	0	1	3	100.00	4
	常 滑	59	61	0	4	1	2	4	96.23	0
	東 海	55	55	0	1	0	1	4	90.00	3
	東 知 多	62	57	0	1	5	6	3	94.87	0
	半 田 南	58	55	0	1	2	4	4	98.59	1
	知 多	36	38	0	3	0	1	3	92.10	0
	6RC	340	336	1	11	8	15	21		8
西 尾 張 分 区	一 宮	80	79	0	2	0	3	3	99.53	0
	津 島	80	81	0	1	0	0	3	96.61	1
	尾 西	42	41	0	0	0	1	3	94.30	0
	稲 沢	65	62	0	0	1	3	3	92.40	0
	あ ま	93	93	0	3	2	3	3	97.78	0
	西春日井	40	41	0	2	0	1	4	100.00	2
	尾張中央	51	50	0	0	1	1	4	97.25	0
	一 宮 北	63	62	1	1	1	2	3	79.22	0
	一 宮 中央	64	61	0	2	4	5	3	95.87	5
	9RC	578	570	1	11	9	19	26		8
東 尾 張 分 区	瀬 戸	82	84	0	3	1	1	4	100.00	4
	犬 山	84	84	0	1	1	1	4	99.00	0
	江 南	67	68	1	4	1	3	3	93.88	1
	小 牧	70	70	0	2	0	2	4	87.71	1
	春 日 井	80	80	0	1	1	1	4	98.11	4
	尾 張 旭	46	44	0	1	3	3	3	97.78	0
	名古屋空港	54	54	0	2	1	2	3	100.00	0
	瀬 戸 北	74	74	0	0	0	0	4	99.23	3
	岩 倉	27	25	0	0	0	2	4	97.00	0
	豊山一城北	35	38	1	3	0	0	4	94.46	1
	愛知長久手	20	20	0	0	0	0	4	88.75	1
	11RC	639	641	2	17	8	15	41		15
西 名 古 屋 分 区	名 古 屋	197	210	0	19	1	6	4	95.93	0
	名 古 屋 西	118	120	1	7	1	5	3	94.00	0
	名 古 屋 南	121	123	1	9	3	7	4	99.20	0
	名古屋みなと	99	95	0	2	5	6	3	100.00	0
	名古屋東南	81	81	0	4	1	4	4	98.97	5
	名 古 屋 中	145	143	0	1	2	3	3	100.00	0
	名古屋瑞穂	81	82	0	2	0	1	4	95.83	0
	名古屋大須	68	68	0	1	1	1	4	98.81	0
	名 古 屋 栄	80	80	0	3	3	3	3	100.00	0
	名古屋名駅	101	106	0	6	1	1	3	93.40	2
	名古屋名南	80	81	0	1	0	0	4	99.00	14
	名古屋西南	55	53	1	5	7	7	3	99.36	9
	12RC	1226	1242	3	60	25	44	42		30
	平均出席率	79	95.2013							

分 区	クラブ名	会 員 数		入 会		退 会		例 会 数	12月 出席率	女 性
		2002年 7月1日	2002年 12月末日	12月	累計	12月	累計			
東 名 古 屋 分 区	名 古 屋 北	105	104	0	3	3	4	3	98.17	0
	名 古 屋 東	98	93	0	0	2	5	3	92.53	0
	名古屋守山	69	69	0	3	2	3	3	92.71	6
	名古屋和合	99	100	0	3	2	2	5	100.00	0
	名古屋名東	75	71	0	0	4	4	4	100.00	5
	名古屋名北	56	52	0	0	2	4	4	98.75	7
	名古屋千種	69	69	0	2	2	2	4	96.94	6
	名古屋昭和	71	69	0	2	3	4	3	98.01	0
	名 古 屋 錦	41	40	0	0	0	1	3	96.49	8
	名古屋東山	58	64	0	6	0	0	3	94.71	1
	10RC	741	731	0	19	20	29	35		33
東 三 河 分 区	豊 橋	118	120	0	4	1	2	4	96.63	4
	蒲 郡	68	68	0	1	1	1	3	92.52	0
	豊 橋 北	105	106	0	1	0	0	4	97.15	2
	豊 川	75	75	1	2	0	2	4	97.98	0
	田 原	70	70	0	2	0	2	3	96.15	1
	豊 橋 南	68	68	0	1	0	1	3	96.97	0
	新 城	68	67	0	0	0	1	3	87.88	0
	渥 美	43	43	0	1	0	1	3	84.68	0
	奥 三 河	35	34	0	0	0	1	3	95.70	3
	豊川宝飯	58	58	0	3	2	3	4	96.30	0
西 三 河 中 分 区	豊橋ゴールドン	71	70	0	1	1	2	3	95.59	0
	田原パシフィック	71	71	0	0	0	0	4	91.30	0
	豊 橋 東	51	49	0	0	2	2	3	100.00	0
	13RC	901	899	1	16	7	18	44		10
	岡 崎	109	106	2	3	2	6	3	99.66	0
	豊 田	85	87	0	5	0	3	3	100.00	0
	岡 崎 南	108	106	0	1	2	3	3	97.92	3
	豊 田 西	97	100	0	4	0	1	3	100.00	0
	岡 崎 東	90	92	0	4	1	2	3	97.86	1
	豊 田 東	85	81	0	0	2	4	4	98.19	0
西 三 河 分 区	岡崎城南	75	77	0	2	0	0	4	98.35	0
	豊田三好	27	27	0	0	0	0	3	91.00	3
	豊 田 中	57	55	0	1	1	3	3	100.00	4
	9RC	733	731	2	20	8	22	29		11
	刈 谷	92	89	1	1	0	4	3	100.00	0
	安 城	71	68	0	2	0	5	3	97.62	1
	西 尾	76	76	0	2	1	2	4	96.55	1
	碧 南	76	78	0	4	1	2	4	98.44	0
	一 色	42	39	0	0	3	3	4	100.00	0
	高 浜	48	48	0	1	1	1	4	98.18	3
西 三 河 分 区	知 立	64	65	0	1	0	0	4	96.61	0
	西尾KIRARA	61	61	0	0	0	0	3	100.00	0
	三河安城	49	49	0	1	0	1	3	97.72	2
	9RC	579	573	1	12	6	18	32	885.12	7
	地区合計	5737	5723	11	166	91	180	270		122

地区内クラブ数 79RC	2002.7.1 会員数	5,737名	増加会員数 (累計)	166名
	当月末会員数	5,723名 (内女性122名)	減少会員数 (累計)	180名
	当月平均出席率	95.20%	差引純増会員数 (累計)	▲ 14名



表紙を語る

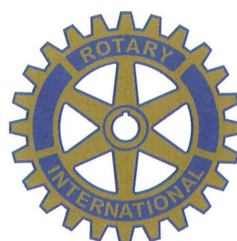
騎馬武者像

(重要文化財) 室町時代
熱田区 地蔵院蔵

馬に若武者が乗る出陣の図です。このような騎馬武者像は、室町・戦国時代に流行したようですが、現存する作品はわずかです。寺伝では足利尊氏の出陣図として言い伝えられてきましたが、最近では室町幕府第9代将軍の足利義尚が近江に出陣する姿を描いたという説が出されています。

いずれにせよ、色彩鮮やかに描かれた本図は、室町時代の騎馬武者像の代表作であるとともに、室町時代の狩野派の画家が描いた作品としても注目されます。残念ながら、空襲により寺の由緒書などが焼失したため、この作品が地蔵院に伝来した経緯は明らかではありません。

(名古屋博物館 学芸員 鳥居和之)



ROTARY
INTERNATIONAL
DISTRICT 2760

国際ロータリー第2760地区
ガバナー 岡部 快圓

〒460-0011 名古屋市中区大須2-21-47 大須観音宝生院内
TEL 052-229-8110 FAX 052-232-1023
URL : <http://www.rotary2760.org>
E-mail : governor02-03@rotary2760.org
